第1回日本・バスク国際セミナーについて

このセミナー計画の話が持ち上がったのはたしか2006年の冬だったと記憶している。共同研究者のホセバ・エチェベステ（バスク大学体育学部教授）と一緒にフィールドワークへ行き、その帰りの車中であった。さまざまに議論してきた内容を2人だけでなく、他の研究者にも共有できないものかということであった。ではいっそのこと合同で研究会をしようととんとん拍子に話が進んだ。そして同じ年の夏にはバスク政府の友人に話を持ちかけ、協力が得られるかどうかを打診した。この計画に興味を示したのは、ほかならぬバスク側であった。その前年2005年には愛知万博があり、スペイン館のイベントとしてバスク文化週間に招かれるという幸運に恵まれて、バスク政府の知人と私とはその時からの付き合いであった。かくして大会開催準備は紆余曲折はあったが着実に進行していった。

2007年9月15日、私たち一行7名はビルバオ空港に到着した。現地集合2名を合わせれば合計9名になる。今回のバスク行の目的は「第1回日本・バスク国際セミナー」をバスク大学と共同開催することであった。タイトルは「東洋と西洋の儀礼、遊び、スポーツ : 聖と俗」。バスク大学側はホセバが中心になり人選と発表テーマを取りまとめ、日本側は私が担当することになっていた。セミナーの形式は、テーマ毎に2人（日本・バスク）が発表し、その2人が中心となってディベートすることであった。あらかじめ発表原稿を各発表者が事前に読んでおくということになっていたが、バスク側がすべて準備するといっていた翻訳が遅れ、私たち日本の発表者はバスク原稿の日本語訳を手に入れることができなかった。急遽翻訳をしなければならず、出発直前に概略を整えるのが精一杯であった。

セミナー会場は当初のバスク大学ではなく、バスクのビトリア市にあるスポーツクラブが用意された。

簡単にセッションのテーマおよび発表者を記すと以下のようになる；

１．身体と運動行動

・21世紀の「身体」を考える

稲垣正浩（日本体育大学大学院教授）

・21世紀における身体運動

ピエール・パルレバ（パリ第５大学ソルボンヌ校名誉教授）

２．幸福と身体

・「じか」にふれる

三井悦子（椙山女学園大学教授）

・身体運動の決定要因とその影響

ラウル・マルティネス・サントス（バスク大学教授）

３．内的運動

・ヨガの身体

松本芳明（大阪学院大学教授）

・ヨーロッパにおける東洋の実践

エスティバリス・ロマラテサバラ（バスク大学講師）

４．システム、競技者、ボールゲーム

・身体とテニス

林郁子（同志社大学講師）

・近代スポーツにおける競技者とシステム

ユーレン・カスティリャーノ（バスク大学教授）

・ペロタ競技のシステム

オイドゥイ・ウサビアガ（バスク大学教授）

５．身体行動文化の多様性

・「水に溶ける」身体　－ジャック・マイヨール

竹谷和之（神戸市外国語大学教授）

・バスクディアスポラと身体運動

クララ・ウルダンガリン（バスク大学講師）

６．スポーツと賭

・闘鶏と日本の刑法

松井良明（奈良工業高等専門学校教授）

・「バサリBasarri」誌にみるスポーツの賭

アルフレド・ロペス・ソソアガ（バスク大学教授）

７．子供と遊び

・幼児の遊ぶ身体

船井廣則（名古屋経済大学短期大学部教授）

・スポーツと遊び－バスクの事例

ホセバ・エチェベステ（バスク大学教授）

８．自然と身体活動の場

・自然と一体化する身体

多賀谷真吾（神戸市外国語大学講師）

・自然活動；登山

アシエール・オイアルビデ（バスク大学講師）

９．スポーツ人類学の現状とその可能性

寒川恒夫（早稲田大学教授）

日本の発表内容はおもに「スポーツする身体」を中心にして、各発表者が自分の研究テーマや、一番接近しやすいテーマを選択した。一方バスク側の内容は「運動行動学」という記号論の応用を駆使したスポーツ分析である。日本側は稲垣氏の「身体論」の各論が中心で、バスク大学の研究者はパルレバ氏の理論を駆使した発表であった。意識から「離脱」し無意識の場に立ち現れる「身体」をテーマとした日本側の研究発表と、日本では20年ほど以前に使用されなくなった記号論がヨーロッパではいまだ健在であり、意識の場から分析するバスクの研究とが真正面から対峙した格好になった。

今回は国際親善も兼ねており、研究や研究方法の差異を確認するだけで十分であった。また実際は討論の時間もあまりなかったのである。発表時間は極力少なくしそのかわりディベート時間を長くという計画だったが、バスクタイムなのか時間厳守をする者は数名で

あった。したがって残念ながらディベート時間はほとんどなかったのである。これは次回の課題として申し送りになるであろう。

このセミナーの前後にバスク民族スポーツのフィールドワークや観戦、舞踊見学、農家訪問といったことも実施されたが、その中の一つを紹介しておこう。

９月１７日（日）午後１時ころに潮汐の影響で水位が変化するリア（河口）でレガッタ体験を終える頃、サプライズがあるとのことで、近くのアイア村へ出かけた。石かつぎチャンピオンに会おうというものである。事前に知らされていなかったので、驚きと嬉しさが交差しどのような人かと想像を逞しくした。

農家の一室に招き入れられると、すでにトレーニングが始まっている。一目見て石かつぎ選手と判明する体格をしている人と近所の高校生くらい子どもとが熱心に石を担いでいた。チャンピオンはイセタ２世(IzetaⅡ)である。軽量級のチャンピオンであり、100キロから150キロの石を専門としている。賭もするという。ギネス記録をうち立てた証書が無造作に壁に飾られている。ギネスに用いた同じ石で時間を半分にして技を見せてくれた。その迫力は筆舌に尽くしがたい。そして私たちへの説明だけでなく、その場を利用して高校生の選手には未知なる重さの石を担ぎ上げさせた。単調なトレーニングにはない機会を利用して自信をつけさせ、次世代を育ててもいる。選手たちはいわゆる自然石を使用するのではなく、親から譲り受けたり各自で持ち上げやすい石を用意したりと石の形には変化が見られるが、石と向き合う真剣な眼差しが印象に残っている。そしてその時イセタ２世や高校生の目にはバスクの男であるという誇りが垣間見えた瞬間であった。

（文責：竹谷和之）